

# 夜間中学校から考えさせられたこと

尾道市立美木中学校  
第1学年 大島 悠輝



同じで、戦争です。戦後も生きていくことだ  
けでも大変で、子どもも働かないと生活でき  
なかつたそうです。だから学校へ行きたいと  
思ってもそれは現実が許さなかつたのです。  
ここに出てくるお年寄りたちの勉強に取り組  
んでいる様子は勉強したくてもできなかつ  
た気持ちを取り戻しているように感じられま  
した。ぼくの母が通信制の学校で働いていた  
時、お年寄りの生徒も多く、とても真剣に授  
業を受けられていて、授業するのに身の引き  
締まる思いだった。ていたのを思い出し  
ました。  
ぼくはどんな気持ちで中学校に通っている  
だろう。と。  
なんとなく行くものだと思っ  
て、なんとなく勉強するものだと思っ  
て通っている気が  
します。だから、学校に通えることをあり  
がたいと思っただことはありません。しかし、  
この本に出てくるお年寄りが、夢がかなつた  
という気持ちで大切に、真剣に勉強している

姿を見て、この感覚でいていいのが振り返って  
ておなくてはないと思いました。  
ぼくたちが教科書をただでもらうことも  
考えてみれば当たり前のことではありません。  
しかし、特にありがたいとも思わず、当然の  
ように受け取って、使い方もすごく大切にし  
ているとまでは言えません。  
その年齢になつたから学校で勉強できるこ  
ともやはり当たり前とは言えません。世界で  
は今でも学校へ行けず働いている子どもたち  
がいるのを知っているのに、今まで学校に行  
けることに感謝したことはありません。少し  
振り返。ただけでも学校に通えたり、勉強で  
きることについて無関心だ。たことが分か  
ります。  
これからは、学校で勉強できることは、手  
えでもらえているチャンスなのだという事  
を心に留めて、このチャンスをお大切にしな  
ればなりません。そして、このお年寄りのよ  
うに、一つ一つの勉強に大切にに取り組んでい

るようになりたいです。  
もう一つ心を郵かされたのは、不登校で中  
学校に通えなくなっている和真に松本さんが  
言った、「不登校だからなんだが知らんが、何  
年も行かずにいるのはそれはそれで勇気のい  
ることだ。でも、おまえは、そうや、自分で  
を守ってきたんだろう。これは逃げたんじや  
なくて、戦ってきたってことだよ」という言葉  
です。  
不登校で学校に来なかつたら、来ている人  
たちから見ると単に「長く休んでいる」にな  
ってしまっていると思います。けれど、実は  
休んでいる人は、「長く戦っている」のだとい  
うことに気づけました。学校でつらいこと  
があるから不登校になっっているということは  
なんとなく分かっています。休みながら戦っ  
ているとは考えませんでした。しかし、少し  
考えてみれば、通うのが当たり前前の学校を休  
むしかなく、いくらの状態にまでなっ  
ていて、心が休めていないわけがないこと  
くらい気づけ

るはずです。それなのに気づかずにきたとい  
うことは、見る必要のあることを見ずに来た  
というのだと思います。しつかり見ようと  
もしないで物事を判断してきていたのだとい  
うことを、松本さんの言葉が気づかせてくれ  
ました。

これからは、物事を決めつける前にアンテ  
ナをもちと張って、物事をいろんな立場から  
見ていくことで相手を少しでも正しく理解で  
きるようになりたいです。

ぼくはこの本から、学校に通うこととのあ  
りがたさとして、勉強に取り組む心構えと、相手  
を理解するときには大事に心構えの一つを感じ  
ることができました。この本から感じたこと  
を、これからは活かしていきたいです。

〇 夜間中学へようこそ 〇

山本悦子 文

岩崎書店

## 〈指導者の言葉〉

国語科の指導においては、「書くこと」の単元のみならず、「読むこと」の単元においても書くことを大切にしてきました。「論理的に深く読み取るために、書くことで思考を整理する」ということを意識的に行わせ、文章を書くことへの抵抗感を無くし、書くことに親しみが持てるように指導してきました。また、「書くこと」の指導においては、必ず構成メモを書いてから書き始めるように指導することにより、論の展開を掴ませること、一文を長くしすぎないことで主語と述語を一致させることに重点的において指導してきました。

本作品は、生徒が未知の事実に対して素直な驚きを表現し、価値観の変化が感じられる作品です。普段の生活の中では知ることや感じる事が難しかったことが、読書体験を通じて考えを深めることができ、自己の中で新たな世界を作り出しています。さらに、自らの今後の読書生活や自らの生き方へと思考が広がっており、読書が私たちに与える力を感じさせる作品です。